

枕草子 第二回

その二 時節

時節というものが、正月、三月四月五月七八九十二月と移り変わり、そうして一年が過ぎて行くのは、面白い。

その三 正月

正月一日は、ましてや、空模様がうらうらとのどかで、珍しく、霞が立ちこめたりするなかを、世の中の、ありとあらゆる人がみな、姿かたちや心持ちをちゃんと整えて、誰も彼もが、お祝いの言葉を交わしたりするのは本当に面白い。

七日には、雪の中から芽を出した若菜を摘んで、いつもは、そのようなものは目にすることなど無いあらたまった所などで、みんなでわいわいと、青々とした若菜を見て騒いだりするの、いかにも面白い。

五節会のお祝いの一つの、宮中でお酒を振る舞ってくれる白馬の節会せちえを観にいきたくて、普段はそういうところには出入りできないような、まちなかに住む里人たちまでもが、清めた車を仕立てて観に行ったりもする。

車なかみかどが中御門のところの、門を通る車の車輪が、がくと沈むように彫込なみである、門の内外を分ける敷居を渡る時に、乗っている人たちの頭が、いっせいに揺れてぶつかり合い、誰かの髪櫛が抜け落ちてしまったりなどして、そんな思いもよらないことで櫛の齒が折れたのを見て、笑い合ったりするのも楽しい。

東側の門の左衛門の陣のあたりまで来ると、殿上人てんじょうびとがおおぜい立っていて、その人たちに仕えて馬の世話をする舎人とねびとに持たせてあつた弓で、馬を驚かせて遊ぶようすを、ちよつと覗いて見たりした拍子ちよつとに、ふと、目隠したてしに立ててある立部たてぶの向うに、ご身分の高い主殿司しよものつかさや女官にようかんなどが行き交うようすが垣間見えたりするのも楽しい。いったいどういう人が、どんな運こころのえが九重にも重なりあつて、そういう身分になれるのだらう、とか思ったりなどもするけれども、見れば内裏ないりは意外に狭くて、舎人の素顔のずいぶんずいぶんと黒い肌も間近に見えて、白粉がはげ落ちたところなどは、まるで地面の雪がところどころ、むらになつて溶け残っているかのようで、とても見苦しい。馬が暴れて飛び跳ねるのもなんだか恐れけれども、そんなことなども、危ないからと、車の中に引っ張り入れられてしまつたりして、あまりよく見えない。